62. ロシアの侵攻

ロシアのプーチン大統領が軍隊をウクライナに侵攻させたのは 2 月 24 日。2 月 11 日のある新聞社の外報部の人の記事は「プーチン氏の心理作戦に注意せよ」の中で「ソ連時代以来ロシアをウオッチしてきた者としては、局地紛争ならともかく、大規模侵攻の可能性はほぼないと言わざるを得ない」と言っていたが、残念ながら外れた。既に 1 ヶ月以上侵攻は続き、その悲惨な被害は愈々甚大だ。

プーチンはウクライナの NATO 加盟の動きに苛立ち、中立化・非武装化・政権交代（傀儡政権樹立）をウクライナに要求しながら、人を殺し、建物やインフラ設備を徹底的に破壊し、何百万人もの膨大な避難民を発生させる戦争を仕掛けている。その行為に大義名分がある筈もない。ロシアという大国が周辺国の主権を脅かす蛮行だ。2 月 25 日の侵攻時の記事は「プーチン氏持論固執」「帝国復活へ欧米の秩序に挑戦」「安保理会議中の軍事作戦　各国失望」と伝える。

「一生懸命」という言葉の由来は「一所懸命」で、鎌倉時代の武士が先祖伝来の所領（一所）を命懸けで守ったことに由来する。人が土地所有（領土）に特別の感情を抱き固執し、隙あらば領土を拡張したいと行動するのは狭い日本だけではない。陸続きの外国では余計に、社会体制の異なる隣国同士の領土問題は深刻になり兼ねない。とはいえ、そのような問題を侵略戦争で解決するというのは信じられない。今の時代では、多少の軋轢はあったとしても人類の知恵で解決できると殆どの人が思っていたのではないか。それがたった一人の独裁者の仕掛けた戦争で世界が狂い出した。

当初、プーチンの精神状態などを疑い、パーキンソン病ではないかといったような説が飛び交ったが、1 ヶ月経った今はそのような報道をみない。正気で行っているということだろうか。

プーチンは数日で首都キエフを制圧できると考えていたというが、ウクライナの予想外の反撃でプーチンの思い通りにはならず、それがかえってロシアの攻撃の激化になっている。3 月 4 日には欧州最大級のザポロジェ原発を攻撃占拠し、世界中を震撼させた。原発施設への攻撃は核戦争にもなることを意味している。避難の人道回廊を設置しても、そこには地雷があったり攻撃もあったりとの情報も伝えられる。そして戦術核や化学兵器使用の脅しなど無差別攻撃になってきている。さらにベラルーシの参戦も伝えられる。NATO が少しでも反撃すれば、第三次世界戦争になりかねない情勢で、ロシアはその足元を見透かしているようでもある。国連安保理も今や戦争を止めるためには役立たずの感だ。独裁者プーチン自身が戦争を止めると言わない限り戦争は続くのか。一体どうすればいいのだろうか。

それでいて、安倍元首相は「核共有議論を」という。ウクライナの危機に乗じて日本の核に関する国是「持たず、つくらず、持ち込ませず」に反することを、この時ばかりと喧伝し、多くの人から批判された。元首相の本音が透けて見える。北方領土問題でプーチンと 27 回も面会を重ねて親密関係を自慢し、多額の経済協力まで打ち出していたことを隠すように行動したのだろうか。モスクワに乗り込んで直談判でもして欲しかったが時既に遅しである。

3 月 26 日のニュースでは、ロシアはウクライナの首都キエフの制圧が無理とみて、「首都制圧より東部重視か」と放映していた。東部マリウポリには 10 万人の市民が未だ残っているという。マリウポリを本当に攻撃するのだろうか、狂気の沙汰だ。

日々多くの人が殺されているのに余りにも身勝手な話だが、この戦争の落としどころはあるのだろうか。東部を支配下に置いて勝利宣言したとしても、ウクライナ国民の真の支配はできないに違いない。一方で、何時になっても勝利宣言出来なければ苛立つプーチンは「窮鼠猫を噛む」ではないが何をしでかすかわからない。

現在の終末時計は「残り 100 秒」で、これは 2020 年 1 月に発表されたものという。ロシアのプーチンの蛮行で終末時計の残り時間は確実に少なくなっているのだろう。

新聞の切り抜きもほとんどがこの戦争関係になり、量も多くなって整理もできず、ファイリングもままならなくなってしまった。早急の戦争終結を願うばかりだ。

（2022 年 3 月 27 日）